
Fantastic Syndrome

麻生柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fantastic Syndrome

【Zコード】

Z5763M

【作者名】

麻生柚葉

【あらすじ】

甘い香りに誘われてようこそ夢の世界へ。
とある旅人が夢に捕らわれ、夢に夢を見て、夢に焦がれる。
沢山の夢の住人の夢を見て、彼は一体何処へ行き着くのか。

01 始まりの夢

不思議な香りに誘われ、旅人はどうやら森に迷い込んでしまったようです。

見渡す限りの沢山の木々に旅人は首を捻ります。

一体いつの間に森に入ったのでしょうか。

前後の記憶が霧がかかったようにはつきりしません。

思い出せるのはこの甘い甘い香りだけ。

木々の匂いは不思議とせず、森に漂うのは甘い甘い香り。

この香りに誘われた気がします。

ふと、旅人の視界に綺麗な青色が入りました。

鬱蒼と茂るどこか暗い印象を受けるこの森には不釣合いなイメージを受ける一人の可憐な少女。

だけれど、不思議と違和感は感じませんでした。

一人佇む少女に旅人は言いました。

「どうやらこの森に迷い込んでしまったらしいんだ。
ここが何処だかきみはわかるかい？」

「ここはそう“有り得ない”場所

少女の口から聞こえたはずの声は静まり返った森に響き、別の場所から聞こえてくるようで

「“有り得ない”・・・場所？」

そうだよ。迷い込んだ旅人さん。あるはずがないんだよ。

謎かけのような言葉を旅人は理解できません。
クスクスと少女の声が響きます。

「ならば、“有り得る”場所に案内してもらえないかい？」

旅人が言うと少女はそのガラス細工のような大きな目を細め、面白そうに旅人を見ました。
そして森の雰囲気に似合わないほど、無邪気に柔らかく笑いました。

少女が笑うたびに強くなっている気がする甘い香りに眩暈がします。

旅人さん。今回は特別だよ。出口まで連れて行つてあげます。

小指を出して少女は言いました。

だけど、この先森を抜けても絶対に私の事を私の森を忘れないでください。

ね？約束ですよ。そうしてもう一度会いましょう。

少女の強い瞳に気圧されたのでしょうか、どこか怖いと感じる思いに反して首は頷いていました。

そして・・・

触れた指先の冷たさがやけにリアルで旅人は夢から覚めました。

誘いはドルチ

残った“モノ”はむせ返る様な薔薇の匂い

果たして旅人はもう一度少女に会うのでしょうか・・・？

旅人さん・・・

少女の小さな呟きは誰に聞かれたる事も無く風に乗つて消えていった。

白い白い白い

真っ白な場所、空間とも言える場所に旅人は立っていました。

白い白い白い

あまりの白さが眩しくて、瞳を閉じても白く染まっている様な気がします。

寂しい空間。何か色があれば良いのにと旅人は願いました。

すると突然に黒い風が吹き、風圧に負けて尻餅をつくと赤い水に落ちました。

驚いて回りを見渡すと黄色い珠が浮かび、藍色のリボンが視界を覆いつくします。

そして白が全て飲み込まれ旅人が恐怖を感じる前に、それは逆に白に飲み込まれました。

何事も無かつたかのように、空間は白に戻ります。

それは、とても駆け足であつという間の出来事でした。

「また・・・だ。」

この空間に来るのは初めてだけれど、この不思議な感覚。
どうしてここに居るのか思い出そうとしても、前後が曖昧になる記憶。

ああ、コレは“夢”？

そうだ、旅人。貴様の考えている事は正しい。

いきなり背後から聞こえてきた声に飛び上がりながらも旅人は振り返りました。

コレは“夢”。貴様の見る夢。全てが貴様次第の・・・な。

一体いつから、いつの間に・・・旅人は開いた口が塞がりません。
声を出すことも忘れ、立ち上ることも忘れ、呆然と見上げるばかりです。

・・・旅人。思い描け、そして思考を止めるな。

旅人の驚きを他所にどこか懐かしむ様な目をして白を身に纏う青年
が言います。

でないと、でないと・・・

ごくり。

静かな空間に旅人の唾を飲む音がやけに大きく響きます。

俺が存在できない。消えてしまう・・・よ。

無表情な顔とは裏腹に響くテノールは儚く消えて溶けていく様でした。

そして青年も空間と同化する。

澄んだ色をじうか濁らせて

白だと思っていた空間は本当は何も無い透明だった

“彼”について考えた時にはもう全てが消えてしまっていた

02 明晰夢

考えて想像して思い描いて。どうか俺に色をください

旅人にその声はもう届かない。

ほうらー見てくださいよ。旅人さん旅人さん！

長いスカートをヒラヒラ翻して彼女は舞う様にはしゃいでいます。

「そんなにはしゃいでいると転んでしまうよ。」

彼女の子供っぽさに苦笑しつつも、太陽のようすに笑い、キラキラ輝いて光る金糸が綺麗だ。なんて柄にも無く思つ。

そんな事を言つてゐる傍から、彼女は派手に転んでしまいました。

うわーん、痛いですよー。旅人さん旅人さん。

「ほうら、言わんこっちゃない。」

お約束な展開に呆れながらも旅人は手を差し出します。

ふと、会わさった上目遣いの彼女の瞳が怪しく光つた様に旅人は感じました。

まるで見ていけないものを見ている様で背筋が凍つてしまいそう。今までの彼女は何処に行つたのか、別人の様に感じてしまうなんて、妹のように愛してきた彼女に恐怖を感じてしまうなんて

ねえ、旅人さん旅人さん。私と一緒に・・・

言いつゝの無い不安感が体中を駆け巡り、体中から警報が聞こえます。

これ以上は後戻りが出来なくなつてしまいそうで・・・

ねえ、こんなキリはシラナイよ

バチンッ！

突然の音に旅人はハツと我に返りました。

どうやら、彼女が目の前で手を叩いた様です。

よくよく彼女を見るとはしゃいで居るけれど、転んだ形跡はありません。

ああ、助かった。何て悪い夢だったんだ。

相変わらずの彼女を見て思わず、小さくひとりごちました。

何も知らない彼女は固まつたままの旅人に怪訝そうに見てします。

「あつ、ああ、すまない。少しボーッとしていたみたいだよ
そういうて微笑んだけれどちゃんと笑えていたでしょうか。」

続きをの言葉は聞きたくないよ

普段通り綺麗に微笑む彼女に少しホッとしただなんて

気を取り直して、旅人は先を急いだ

03 白昼夢

あー、待って下さいよお！

ねえ、旅人さん旅人さん。気を抜いたら引きずり込まれますよ。ふ
ふふつ

後ろから追いかける彼女の笑いに含まれたモノに気付くのは誰も居ない。

しくしく、シクシク

誰かが涙する音が聞こえます。

ドンドン、どんどん

誰かが壁を叩く音が聞こえます。

一人の子供が手を赤に染めながら必死に壁を叩いています。

白い壁がどんどん赤に染まっています。

痛さなど忘れたかのように真剣な表情で何かを叫び続けています。

旅人は言います。

「どうして、そんなになるまで壁を叩くんかい？」

僕の声はいつだつてあの子に届くことはないけれど、あの子がそこに居る。

大粒の透明な涙を流しながらその子は答えます。

「この壁の向こうに誰か居るのかい？」

何処までも続いていそうに聳える壁が、拒むように立ちはだかつて邪魔をしていました。

もう一人の“僕”が居るんだよ。

旅人はその子の言つ事が半分も理解できませんでした。
分つたことは壁の向こうにあの子が居るということ。

ならば、

「ならば、壁を壊すのを手伝おう」

壁を壊してしまえどうしてそんな事を思つたのか旅人には分りません。

どう見ても壊れそうも無い壁なのにどうしてそんな事を言つたのか
旅人は分りません。

痛々しいその子を見ていられなかつたのかもしれません。
その子に何かを重ねていたのかもしれません。

だけれど、どうしても壁を壊さないといけないような気がしたので
す。

本当に？嬉しい

目を真つ赤にしながらその子は笑いました。

旅人は、とりあえず壁を叩いてみることにしました。

すると、そこまで力を入れた訳でもないのにその子がどんなに叩いても壊れなかつた壁が呆氣なく崩れ落ちて行きました。

「どうし・・・て？」

思わぬ出来事に旅人は目をこすつてしましました。
しかし、変わらずそこには崩れ落ちた壁がありました。

瓦礫の向こうに子の子と似たようなあの子が居ます。

嬉しそうに一人して駆け合ひ抱き合ひ瞬間がまるでスローモーションのように流れ、旅人の目に焼きついて離れなかつた。

その子があの子の名前を叫んだ。

逆さま、届かなかつた僕の声

その声はノイズがかかつた様に聞き取ることが出来なかつた

赤と涙でぐずぐずになつた“あの子”が笑つた

04 逆夢

ありがと。 ありがと。 壁を壊してくれて ありが

と

ふわりとやの子の大きな黒いリボンが揺れた。

しくしく、シクシク

誰かが涙する音が聞こえます。

ドンドン、ドンドン

誰かが壁を叩く音が聞こえます。

白く聳え立つ壁に一人の子供が手を赤に染める子供
どうしてだろう、酷く既視感を感じる。

あの子は初めて見る子なのにどうしてなんだらう・・・

「どうして、そんなになるまで壁を叩くんだい？」

その子の声はいつだつて僕に届く」とはないけれど、その子が
そこに居る。

僕の声はいつだつてあの子に届く」とはないけれど、あの子が
そこに居る。

大粒の透明な涙を流しながらあの子は答えます。

「この壁の向こうに誰か居るのかい？」
何処までも続いていそつと聳える壁が、詰むよつて立ちはだかって
邪魔をしていました。

もう一人の“僕”が居るんだよ。
もう一人の“僕”が居るんだよ。

重なる重なる。頭が痛い。

旅人はあの子の言つ事が半分も理解できませんでした。
分つたことは壁の向こうにその子が居るということ。

ならば、

「ならば、壁を壊すのを・・・」
出て来た言葉は無意識で、壁は壊れると思いました。
だけれど、どれだけ壁を叩いても聳え立つ壁はびくともしませんで
した。

叩いても叩いても手に残るのは痛みだけで壁に傷一つつける事が出来ません。

どうじて、どうして、あっちの壁を壊したの・・・！

どうじて、どうして、どうじて！――

悲痛な叫びが旅人を攻めました。

訳が解らない。

ああ、頭が痛い。

耐えられず、視界が暗転して倒れるのがスローモーションのようを感じました。

薄れる意識の中 赤と涙でぐちゃぐちゃになつた 見たことの無い

“ その子 ” が 泣いた のが見えた気がした

もう一人の僕は何故こんなに近くで遠い
手のひらから零れ落ちた僕の想いはカタチを変えてしまつたんだよ。

僕は君にどうしても届くことが出来ないんだ

05 正夢

あいたい。あいたい。近くて遠い、同じで違うもう一人の “

僕 ” ただ、会いたい

届くことの無い言葉は無機質な壁にぶつかって壊れた。

僕の声はいつだって君に届くことはない
君と僕との距離は、いつまでも縮まらない

の間の間の間

君の声はいつだって僕に届くことはない
僕と君との距離は、いつまでも縮まらない

の間の間の間

届いてほしい 遠ざかりたい
届いてほしくない 近づきたい

想いを声に出したら、手のひらから零れ落ちた

零れ落ちた言葉は、地に染み込んで花になり
零れ落ちた言葉は、空に浮かんで星になり
零れ落ちた言葉は、海に溶けて霧散する

僕の想いは力タチを変えてしまったんだよ

だから、僕は唄おう
想いが伝わるよつにと

だから、僕は祈ろう
いつの日か届くと信じじて

だから、僕は願おう
どうしても、君に　あ　い　た　い

綺麗な唄が聞こえたきがした。

おやすみ。どうか、良い夢を
そう言って千守唄運んでくれたのは誰だったのか

この頃を“あの子”と“その子”に伝えてあげたかった
06 微醉の夢

やあやあ、旅人くん。『機嫌麗しゅう！

やけにフレンドリーにツナギ服の少年が旅人に話しかけます。

返事をしようとしたらもじもじとした音だけが零れ落ちました。
口調と整った容姿に服装が全くチグハグな少年にどう対応して良いのか旅人は焦っているようです。

何だろ?」の感じは

何をそつ変な顔をしている。別にとつて食いはしないぞ。
心底愉快だと言った顔で笑います。

からかわれていると分っていても、苛立たないのはこの少年の雰囲
気の所為なのでしょうか。

ああ、何かが引っかかる

最近暇をしていたんだ。今日は旅人くんに出来て嬉しいよ

もう少しで届きそうな。

そんなにジッヒと見られると、ボク穴が開いたりやいそつだよ。

ホンの少しの違和感

ねえ、旅人くん聞いてる?

ああ、この少年は・・・

なあに?ボクの事が知りたいの?

吸い込まれそうな瞳を輝かせ少年は言います。

旅人の口の動きを読み取ったかのように少年の違和感が増幅していきます。

簡単には教えてあげないよ。だつて、簡単に教えたら詰まらないじやないか

カラカラ、ケラケラ

笑い声が響き渡ります

ボクはいつだつて身近な所に隠れているんだから
見つけ出して見せてよ本当の“ボク”を

ねえ、旅人くん？

耳元で楽しげで甘い声が聞こえた

耳鳴りが鳴り止まない

手遅れになる前に“ボク”を見つけることなんて出来るのかな？

この場で誰も声を発していないことに気が付いてしまった

07 悪夢

気付いた時にはもう遅い。だってボクは 悪夢 だ

嘲笑う様に声だけが旅人に届いた

蝶が踊る

主は実に興味深い。

和装の娘が唄う様に言葉を紡ぎます。

「どうして?と聞いても良いのかな」

何かに急かされるように歩く足を止める事無く旅人は言いました。

蝶が舞う

自分で、分らないのかい?それは実に面白い。
まるで新しい玩具を発見した子供のようだ。

「焦らさないで教えて欲しいな。僕は何処にでも居そうな旅人だと
思うんだけど。」

歩いても歩いても先が見えません。
旅の終わりが見えません。

蝶が煌く

旅人のう。・・・本当に?

えつ?

蝶が揺れる

何の為に、何処に行く？何故旅をする？

あれっ？

何故だろう。答えられない。

蝶が晒づ

ヌシ ハ イッタイ ナニモノ ナンダイ ？

ボク ハ タビビト ジヤ ナイノ？

そして蝶が指し示す

妾は一つだけ親切に教えてあげようかの。ほんうら、良く見てみ。

そういうて、手に持つ扇で指し示す先には・・・

僕は“僕”という存在に初めて疑問を持った
気付かないだけでとつぐの昔に賽は投げられていたんだよ

今まで片足ずつ別の道を歩いているだなんて思つても見なかつた

08 胡蝶の夢

さあ、存分に悩め。どちらも正解とも、不正解とも言えは
しないが、どちらを選ぶかは主次第だよ。

夢か現か、そして“今”はどうに分類される…そつと蝶は囁く

漆黒の片翼が羽ばたき、緋の髪が靡きます

愚か者！何を迷う必要があるのだ
理不尽だと思いながらも、投げ出してしまったこと口の片隅が
言った。

尖つた尾が蠢き、深緑の服が翻ります

我的存在は人知の及ぶところになどは無い！
聞いてはいけないとと思いながらも、誘惑が胸を突いた

両手を天へと掲げ、地を見下します

汝の存在などちつぽけで我には悩む必要性が解らん！
これは自分の口だと思いながらも、誰かに託してしまったかった

底の見えない瞳が細まり、形良い唇を歪めます

タビビトよ…決められないのなら、我が下してやる！じゃない

か！！

きっと次が、最後の言の葉

それは神々しくもあり、禍々しくもありました

聞け！我のお告げを

ああ、“僕”が出来上がる

FANTASTIC SYNDROME

さて、鬼が出るか蛇が出るか。それとも・・・

彼の者の言の葉は高らかに鳴り響く

09 霊夢

不満などは聞かん！我の決定が全てだ そのちっぽけな存在

に刻み付ける！！

囚われて捕らわれてもう逃れることなど出来ない

こゝは一体何処なのでしょうか
ゆうゆうり、ゆうゆうり

廻って廻って歩き続ける“誰か”が見えます。
ゆうゆうり、ゆうゆうり

まるで夢心地、ふわふわ、ふわふわ、浮かんでいるよつ
酷く艶でもやもや、もやもや、よく見えません。

“誰か”の歩く先に何か落ちているのが見えます。
小さな、小さな何か。

遠くて小さすぎて旅人には目を凝らしても良く見えません。

“誰か”は落ちていい物を大切そつと嬉しそうに微笑んで胸
元に付けました。

香る、懐かしい甘い香り

「ああ、“僕”がいる」
唐突に旅人は理解しました。
あれは、あれは・・・

「何だかとても心地よくて眠いけど、覚えておくれもう一人の“

僕”

忘れちゃ駄目だよ。過去の“僕”

靄がかかつたように見えていたのが嘘のよう晴れ、少し先の“僕”的微笑みが良くな見えました。

ありがとう

どういたしまして

はじめまして、未来の“僕”
もうすぐ会いに行くから、少しだけそこで待っていて

それはきっと恋焦がれた予感

10 予知夢

ありがとうございます

見付けてくれて

どういたしまして

11 旅人の夢

キラキラと星の降る夜に旅人はネガイボシを拾いました。
巷の噂では、この星は願いを叶えてくれる珍しい物らしい。

色々な色に輝いて、人工では決して創れないであろうとしてもとても
綺麗な星

夢を星に託すのは他力本願かもしれないけれど、願わずには居られないだろう。

夢を願うよ

沢山の夢があるけれど、たつた僕は一つの夢を決めたんだ。

夢を描くよ

止まる事無く、進んでその先と一緒に描こう。

夢を見るよ

それが、僕の存在する理由にしたいから。

ねえ、次に会えたならちゃんとと思い描く事を誓つよ。
ねえ、これからは目を逸らさないと約束するよ。
ねえ、伝わらないなら僕が橋になろう。
ねえ、今度は間違えないで壊してみせるよ。

ねえ、どんなに時間がかかっても本当の姿を見つけ出してみせるよ。

ねえ、例えそれが間違いでも僕は選ぼうと思うんだ。

ねえ、次はこの前言えなかつたお礼が言いたいよ。

ねえ、未来の“僕”。これで良いんだよね？

残像が燻つて頭から離れない
甘い甘い香りに誘われる

星の少女が問いかけます。

貴方の願いは何ですか？

お星様に願いを込めて

どうかあの時の約束を現実にしてください

最後にネガイボシは一際眩しく青く光つて消えた

11 旅人の夢

叶えましょ。 貴方がそれを望むのなら

少女の瞳が悲しみで揺れた

12 醒めない夢

一人の旅人が森へ行きました。
きっともう、戻ることは無いのでしょう。

「こんにちわ。」

旅人は少女の姿を懐かしむように目を細めて笑う。

「こんにちわ。

少女は旅人の姿を包み込むように優しく笑う。

少女の口から聞こえた声はしつかりとした重さを含んで

「約束を果たしに君に会いに来たよ」

「ようこそ旅人さん。私の森へ

クスクスと少女の声が響きます。

そのガラス細工のような大きな目を細め、確かめるように旅人を見ました。

そして本当に嬉しそうに花のような顔で笑いました。

少女が笑うたびに強くなっている気がする甘い香りに眩暈がします。

お疲れでしょう。旅人さんまずはゆっくり休んでくださいね。

少女の優しい瞳に促されて、旅人はゆっくりと瞳を閉じました。

そして・・・

触れた指先の温かさに旅人は安心して夢へ墮ちていきました。

彼に、青い薔薇を送りましょう。

甘く甘く香る沢山の青い薔薇を

ドルチエに誘われて

手にした“モノ”はむせ返る様な薔薇の匂い

旅人は約束を果たし少女との再会しました

12 醒めない夢

旅人さん　・・・　お帰りなさい

少女の小さな呴きは旅人のもとに確かに届いた。

「ただいま　僕の夢」

12 醒めない夢（後書き）

いかがだつたでしょうか？*Fantastic Syndrome* コンセプトは夢の擬人化。 私なりの夢達ですが、あえて細かくは描寫せず幻想的な雰囲気を出そうとしてみました。

解釈についてはご想像にお任せします。
どうか、お好きに解釈して頂いて貴方なりの夢を想像して頂ければ幸いです。

以下、各自の簡単な夢についての補足説明。

青い薔薇の少女の夢

始まりの夢。First Dream

ドルチエ「柔軟に」「甘美に」「優しく」に誘われて
青い薔薇「有り得ない」「不可能」「奇跡」

とても“甘美”香りに惹きつけられ迷い込んだ場所はあるはずが無い“有り得ない”場所で普通行く事は“不可能”

そこに居た少女は“柔軟”に笑い“優しく”出口を教えてくれました。

帰つてこれたのはきっと“奇跡”

透明な空間の青年の夢

明晰夢

自分で夢であると自覚しながら見ている夢。Lucid Dream

“夢”を見る人が思い描かないと存在できないんだよ。

現実の中に潜む少女の夢

白昼夢

目覚めている状態で見る現実味を帯びた非現実。Day Dream
現実も非現実も紙一重で背中合わせ。

逆さまのあの子の夢

逆夢

事実とは逆さまの夢。実際とは全くの逆。Dream not come true

一番意味不明なのはこの話と次の話の気がします。

本当のあの子の夢

正夢

夢で見たことが現実に起こると考えられる夢。実際に起つた夢。

Dream came true

二人は出会えてないのが現実です。

まどろみの中の夢

微醉の夢

まどろみの中。

前一作からの派生。これは夢の住人じゃありません。子守唄。

連れられず終わらない夢

悪夢

恐ろしい夢。悪い夢。Nightmare

悪夢とは何処からが始まりで何処からが終わりなのか。
どうか、虚像の彼に惑わされぬよう。

蝶が夢見た夢

蝴蝶の夢

夢と現実との境が判然としないたとえ。 You with not

you

夢か、現実か道は二つ
だけど本当にその二つの道は“夢”と“現実”に繋がっているのですか？

摩訶不思議な彼の夢

靈夢

人知を超えた存在によるお告げが現れると言つ摩訶不思議な夢。 O

r a c i e d r e a m

決められないのなら託してしまいたい

先を知らせる夢

予知夢

未来のことを夢の中で見ること。 P r o s p e c t d r e a m
出合つたのは他でもなく、少し先の自分。

願いを乗せた夢

旅人の夢

寝て見る“夢”では無く希望の方の“夢” M y d r e a m
これも同じく夢の住人ではありません。流れ星

醒めない夢

醒めないの夢 L a s t D r e a m

目覚めることはきっと無い

“夢”？違うよ。これが僕の“現実”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5763m/>

Fantastic Syndrome

2010年10月11日17時15分発行